

アリストテレスにおける問答法と難問の方法

赤井清晃

1. はじめに

アリストテレスにおける問答法(ディアレクティケー)と難問(アポリアー、文字通りには、道がないこと、すなわち、行き詰まりの状態)の方法は、どのような関わりを持つのかという問題を考える場合、「ディアレクティケーとは何であるか」という問題と、「アポリアの方法とは何であるか」という問題をそれぞれ明らかにした上で、両者の関係を考察すればよい、というはもっともなことではあるけれども、ことはそう簡単ではない。その理由の最大のもの、おそらく、アリストテレスにおいて「ディアレクティケーとは何であるか」ということが一様に答えられない問題だからである。主に、『トピカ』や『詭弁論駁論』に基づいて、ディアレクティケーについて定義的な記述を読み取ることではできるけれども、それだけでは、「ディアレクティケーとは何であるか」という問題を読み解いたことにはならない。アリストテレスにおいてディアレクティケーが何であるか、どのように用いられる方法なのか、そもそも、方法であるのか、方法であれば、何のために用いられる方法なのか、また、ディアレクティケーはどのような意味をもつのか、それは、学問的知識(学知、エピステーメー)の獲得に際して、積極的な意味をもつのか、もし、ディアレクティケーがアリストテレスにとっても、積極的な意味をもつのならば、アリストテレスがディアレクティコイ(問答法を用いる人々)に批判的に言及すること(『形而上学』Ⅰ巻2章)は、どのように読み解くことができるのか、等々、次々

に疑問が生じてくる。それは、アリストテレスが、一方では、ディアレクティケーを、「吟味(ペイラ)」や「論駁(エレンコス)」の機能をもつ方法として論じながら(『トピカ』)、他方で、哲学にたずさわる者(ピロソポイ)と区別して、ディアレクティコイ(専らディアレクティケーにたずさわる者)が批判的に言及する(『形而上学』Ⅰ巻2章)ことから、ディアレクティケーには、二つの側面があるように思われるからである。

そこで、アリストテレスのディアレクティケーに何らかの積極的な意味を見い出そうとする人々は、ディアレクティケーに区別を設けて、少なくとも二種類のディアレクティケーを想定し、その一方に、積極的な意味を付与し、他方を、消極的なものとして位置付けようとする傾向があるように思われる。もっとも、ここでも、ことはそう単純な二分法で片付くものではなく、解釈者によって、区別されたディアレクティケーの内実には、差異がある。しかし、いずれにしても、アリストテレス自身が、ディアレクティケーを二つに分類して、そのそれぞれに名称を与えているわけではない。そのため、解釈者たちは、独自に、区別のための名称をつくり出している。例えば、学問としての第一哲学のためにアリストテレスが展開した"strong dialectic"と、『トピカ』等でその内実が展開される"pure dialectic"を区別する Irwin (p.19, passim) や、アリストテレス以前に行なわれていた"dialectical arguments"と、アリストテレスが『トピカ』で提示している"an art of

dialectic"の区別を強調するSmithや、さらに、学的論駁を任務とする"supra-dialectique"と、学的論駁には至らない"infra-dialectique"の区別に言及するBrunschwig(p.189)などが、これである。Irwinの主張する区別に対しては、テキスト上の根拠がないとして、多くの人から批判がなされている(Cleary, p.199, n.2; Smith, 1997, p.xviii)けれども、Wehrleの次のコメントは、ディアレクティケーの内実を、いかなるものとして捉えるかという解釈者の立場次第で、これらの諸解釈を、どのようにも批判できるということを示している。

Euphemistic qualifiers such as "pure," "weak," or "strong" should not blind us to the fact that Irwin's "strong dialectic" is Orwellian in its attempt to combine that which cannot be combined. The force of the epithet "strong," when added to "dialectic," can only signify the very opposite concepts by which dialectic has been distinguished from science. The full significance, therefore, of "strong dialectic" must be something like "that special function of dialectic that is no longer dialectical at all, but rather scientific," as if we were to divide actions into free and unfree, and then subdivide the free actions again into those free actions that are unfree. This is not paradox, but outright contradiction. (Wehrle, pp.63-64)

'pure' とか 'weak' あるいは 'strong' という婉曲的な限定語句によって、我々は、結び付けられ得ないものを結び付けようと試みている点で、Irwinの'strong dialectic'が、Orwell流の事実の歪曲であるという事実を、目をくらまされてはならない。'strong'という形容語句が、'dialectic'に付されても、それがもつ効力は、せいぜい、それによってディアレクティケーが、学知(エピステーメ)から区別されたまさに正反対の概念を表示できるにすぎないのである。従って、'strong dialectic'が意味するところは、完全には、何か「もはや、ディアレクティケー的ではなくなった、むしろ、学知(エピステーメ)的なディアレクティケーの特種なはたらき」のようなものであるにちがいない。それは、あたかも、我々が、行為を随意的行為と不随意的行為に区分し、その後、さらに、その随意的行為を不随意である随意的行為へと下位区分するようなものである。これは、パラドックスなどではなく、完全に矛盾である。

つまり、Irwinの主張するようなディアレクティ

ケーの区別に関して言うと、Wehrleの立場からすると、学問的な認識にいたるディアレクティケーというものは、形容矛盾といってもよく、それはもはやディアレクティケーではない、ということになる。

解釈者によって、区別されたディアレクティケーの内実異なるけれども、今は、その詳細に立ち入らない。むしろ、より根本的な問題として、ディアレクティケーが区別されるといっても、内実が実質的に異なる二つのディアレクティケーがあるのか、それとも、ディアレクティケー自体の内実実質的にひとつであり、その使用のされ方、あるいは、使用される意図や目的によって異なったものとしてあらわれるだけなのか、ということがある。このような解釈としては、ディアレクティケーには、少なくとも、論敵に対して、うまく論じ勝つための"public use"と、学的論証(アポデイクシス)によっては不可能な、学問の前提命題(原理)の探究のための"scientific use"の二種類があるが、ディアレクティケー自体は同一のものであるとするBertiの解釈がある(cf. Berti, p.130)。Bertiの場合は、基本的に、アリストテレスの哲学全体に思想的発展を想定せず、初期から後期まで変わらないものであると考える。従って、ディアレクティケーの概念に関しても、それ自体としては変らないひとつのディアレクティケーがあるだけであり、様々なディアレクティケーがあるかのように思われるのは、その使用のされ方の違いにすぎないと考えている。また、ディアレクティケーそのものには、区別を設けず、しかし、哲学の方法としてのディアレクティケーを養護しようとするBoltonは、この点で、Bertiと軌を一にするとと言えるが、これに対しては、アリストテレス自身が、自らの哲学の方法として、積極的な意味で「ディアレクティケー」という表現を用いていない、ということを経由に、Devereux(p.258, n58)は、これを認めない。確かに、アリストテレスが、ディアレクティケー的な手法で考察を行なったと、通常、みなされる箇所、例えば、『ニコマコス倫理学』VII巻1章の「アクラシア論」や、『自然学』IV巻の「場所論」などでは、アリストテレス自身は、「ディア

レクティケー」という語を用いていない。このテキスト上の事実直面して、Devereuxのように、アリストテレスはディアレクティケーを用いていない、と判断することは、ことの真相を見抜けていない、と言えるかもしれない。というのは、アリストテレス自身が、「ディアレクティケー」という言葉を用いていないということは、単なるディアレクティコイ (問答法家) の術としてのディアレクティケーと、自らの方法としてのディアレクティケーを区別するための言葉をもたなかったのが、自らの用いる方法が、単なるディアレクティコイの術としてのディアレクティケーと誤解されることを避けるために、意図的に、ディアレクティケーという言葉を用いなかったのではないかと考えられるからである。それほど、ゼノンやプラトンの哲学の方法としてのディアレクティケーは、強い影響力をもっていたと考えられる。従って、同じくディアレクティケーと言っても、アリストテレスの場合、それ以前とは、内実において大きな違いがあり、「ディアレクティケー」という名称によって、アリストテレスの同時代の人々に理解されるものとは異なっていたという可能性が大きいのではないかと考えられる。アリストテレスは、それを懸念して、意図的に、ディアレクティケーという名称を用いなかったのではないのか。

ではもし、アリストテレスが、このような懸念から、ディアレクティケーという名称を用いていないとしても、アリストテレスのディアレクティケー的な手法による考察の実際と、『トピカ』におけるディアレクティケーについての記述をつなぐ、語られなかったのではなく、確かに、語られたものとして、根拠になるものはないのだろうか。ちょうど、フォーレのレクイエムの Agnus Dei の中で、テノールの斉唱の後、ソプラノが突然、C音でLuxと歌いだし、この持続するC音が、それまでのC-Durから、As-Durへの転調を可能にし、続く aeterna liceat cisを誘い出すように。そのようなものとして、「アポリアー (難問)」の方法がある。

2. ディアポレーサイ

ルガリーニが想定し、「ディアポレティカ」と

名付けた、アリストテレスの哲学の方法は、

- (1) ἀπορῆσαι (アポリアーの状態に至り、アポリアーを明るみに出すこと)、
- (2) διαπορῆσαι (そのアポリアーがもつ様々な観点から、それらを然るべく解きほぐすこと)、
- (3) εὐπορῆσαι (アポリアーの解決に進むこと)

という3つの契機からなっていた (Lugarini, p.145) けれども、ここで注目すべきなのは、(2) διαπορῆσαι である。ただし、ルガリーニによる規定が、妥当であるか否かは、テキストによって確かめられなければならない。

アリストテレスは、『トピカ』A巻2章において、ディアレクティケーを主題とする『トピカ』(おそらくは、それに続く『詭弁論駁論』)という論巧(プラーグマティアー)の有用性を3つ挙げている。その三番目に、「哲学に即した学知」に対しての有用性が語られている。

Πρὸς δὲ τὰς κατὰ φιλοσοφίαν ἐπιστήμας, οἱ δυνάμενοι πρὸς ἀμύπτερα διαπορῆσαι ῥᾶον ἐν ἐκάστοις κατοψόμεθα τάλληθές τε καὶ τὸ ψεῦδος· ἔτι δὲ πρὸς τὰ πρῶτα τῶν περὶ ἐκάστην ἐπιστήμην. ἐκ μὲν γὰρ τῶν οικείων τῶν κατὰ τὴν προτεθειῶσαν ἐπιστήμην ἀρχῶν ἀδύνατον εἰπεῖν τι περὶ αὐτῶν, ἐπειδὴ πρῶται αἱ ἀρχαὶ ἀπάντων εἰσὶ, διὰ δὲ τῶν περὶ ἕκαστα ἐνδόξων ἀνάγκη περὶ αὐτῶν διελθεῖν. τοῦτο δ' ἴδιον ἢ μάλιστα οικεῖον τῆς διαλεκτικῆς ἐστίν· ἐξεταστικὴ γὰρ οὕσα πρὸς τὰς ἀπασῶν τῶν μεθόδων ἀρχὰς ὁδὸν ἔχει.(101a35-101b4)

また、ディアレクティケーを扱うこの論巧は、哲学に即した諸学知との関係で、有用である。というのは、我々は、議論の賛否両面に対して、そのそれぞれの場合に、ことの真偽を見通すことによって、けわしき議論の道を通り抜けること(ディアポレーサイ)ができるからである。さらにまた、各々の学知に属する第一の前提命題や原理との関係でも、有用である。というのは、一方で、当該の学知に即した、それに固有な諸前提命題に基づいて、その諸前提命題について、何ごとかを言うことは、それらの諸前提命題が、すべての前提命題の中で第一のものであるから、不可能であり、他方、個々のことがらをめぐるとの通念に基づいて、それらの諸前提命題について、述べざるをえないからである。そして、このことが、ディアレクティケーに、固

有な、あるいは、もっとも、本来的な任務である。というのは、ディアレクティケーは、批判・吟味をするものであることによって、すべての探究の始原・諸前提命題へ至る道をもっているからである。

このテキストは、ディアレクティケーが、学知に関して何らかの有用性をもつことを示唆しているので、繰り返し引用・言及される箇所であるが、その解釈をめぐることは、少なくとも二つの問題がある。

その一つは、「哲学に即した学知(エピステーメー)」というものが、「諸学知(複数形)」で言われたり、「各々の学知(単数形)」と言われるものが、個別学・領域学(いわゆる、個々の学問)を意味するのか、あるいは、第一哲学をも意味するのか、というものである。この箇所の「哲学に即した学知(エピステーメー)」の解釈としては、直ちに、『形而上学』の第一哲学と結びつくものではないとして、いわゆる個々の学問的知識と解されているように思われる。しかし、『トピカ』と『形而上学』各巻との関係を考慮しなければならないとしても、この箇所の「哲学に即した学知(エピステーメー)」が、「存在の学」としての第一哲学の学知(エピステーメー)を排除するものであるとは言えないであろう。実際、ド・レイクの次の発言は、アリストテレスの「学知(エピステーメー)」には、個々の学問領域における、ひとつひとつの学問的知識という意味に並んで(konnotatie)、「存在の学」としての第一哲学の考察対象である「存在(zijn)」が、その射程に入っていることに注意をうながしている。

anderzijds heeft de griekse term epistēmē zozeer een geijkte betelenis en een ontologistische konnotatie in de antieke en middeleeuwse wijsbegeerte(=‘de kennis van alles wat zò is en niet anders zou kunnen zijn’) dat een modern gebruik ervan wat verwarrend zou kunnen werken. (de Rijk, p.72)

他方、ギリシア語のエピステーメーという語は、古代および中世の哲学においては、広く用いられる意味と存在論的な意味とをあわせもっている(=「現にあるように存在し、それ以外の他の仕方では存在しえないところのすべてのものについての知識」)が、それについての現代の

この言葉の使い方をすれば、かなり、混乱したものであるとして作用してしまうだろう。

もう一つは、ディアレクティケー、あるいは、ディアレクティケーを扱う『トピカ』および『詭弁論駁論』という論巧が、「哲学に即した諸学知との関係で、有用である」とか、「すべての探究の始原・諸前提命題へ至る道をもっている」と言われる場合、ディアレクティケーは、「すべての探究の始原・諸前提命題へ至る道をもっている」だけであり、なるほど、有用ではあるが、「すべての探究の始原・諸前提命題」に到達し、それを獲得するわけではない、ということなのか、それとも、「すべての探究の始原・諸前提命題」に到達し、それを獲得するというところまでを意味するのかという問題である。この問題は、『形而上学』Γ巻2章で、

ἔστι δὲ ἡ διαλεκτικὴ πειραστικὴ περὶ ὧν ἡ φιλοσοφία γνωριστικὴ (1004b25-26)
哲学がそれらについて認識をすることがらについて、ディアレクティケーは吟味をする

と言われていることを、そのまま受け取るならば、ディアレクティケーは、「すべての探究の始原・諸前提命題」に接近するとしても、到達するわけではない、とする解釈にかたむく。吟味し、試すことは、『トピカ』で記述されるディアレクティケーの重要な性格の一つであるけれども、ディアレクティケーは、吟味するだけで、哲学のように、「認識する」という段階にまで至らないとアリストテレスは考えていたのかどうか問題である。この点を明らかにするためには、「吟味(ペイラ)」ということで、アリストテレスが何を意図していたのかを確認しておく必要があるだろう。

例えば、『詭弁論駁論』11章では、次のように言われている。

Ἔστι τὸ ἢ ἀποφάναι ἀξιοῦν οὐ δεικνύντος ἔστιν ἀλλὰ πείραν λαμβάνοντος· ἡ γὰρ πειραστικὴ ἔστι διαλεκτικὴ τις καὶ θεωρεῖ οὐ τὸν εἰδόμενον ἀλλὰ τὸν ἀγνοοῦντα καὶ προσποιούμενον. (171b3-6)

肯定すること、あるいは、否定することを要求することは、証明(教示・証示)する者に属する仕事ではなくて、吟味を行なう者に属する仕事である。というのは、ペイラスティケー(吟

味の術) はある種のディアレクティケーであって、知識 (学知) をもっている者を、ではなくて、知識をもっていないのに、もっているふりをする者を (考察の対象として) 視野にいれているからである」

ここで、「証明 (教示・証示) する者」と言われているのは、この直前の箇所、「教授・教示することは、問答することとは別のことである ἕτερον τὸ διδάσκειν τοῦ διαλέγεσθαι」(171a38-171b1) と言われていることと、『詭弁論駁論』2章での問答の形で行なわれる議論 (ロゴイ) の4分類 (didaskalikoi 教授的, dialektikoi 問答法的, peirastikoi 吟味的, eristikoi 争論的) (cf. 165a38-165b11) とを照らし合わせてみると、ここでは、didaskalikoi 教授・教示的な議論、つまり、『トピカ』A巻1章での分類における「論証」を行なう者のことであると考えることができる。しかし、アリストテレスは、ディアレクティケーの内に、「吟味 (ペイラ)」のはたらきを含めたり (『詭弁論駁論』11章)、ディアレクティケーと吟味的問答を区別したり (『詭弁論駁論』2章) しており、この限りでは、アリストテレスのディアレクティケー概念そのものの輪郭にあいまいなどころがあることになるが、このことは、逆に、アリストテレス自身が「ディアレクティケー」という語を用いるときに、「吟味」というのはたらきに注目したときには、特に、「ペイラステイケー (吟味の術)」と言い、吟味以外のはたらきをもつディアレクティケーと区別したと考えられる。この「吟味」というのはたらき (機能) は、ディアレクティケーにとっては、「論駁 (エレンコス)」と並んで、重要な性格であるが、先に引用した『形而上学』の記述における、「哲学」の「認識する」というのはたらきと対比するとき、『詭弁論駁論』の「証明 (教示・証示) する者」を、「哲学」を行なう者、また、『トピカ』の「論証」を行なう者と重ね合わせて、「哲学」のほうに、「認識」、「証明」および「論証」を、従って、「学知 (エピステーメー)」を担わせ、他方、ディアレクティケーのほうに、「吟味」するはたらきを担わせる、という解釈が行なわれる。これは、なるほど、『形而上学』Γ巻2章での「吟味の術としてのディ

アレクティケー」と、『トピカ』A巻2章での、「哲学に即した学知に対して有用なディアレクティケー」とを整合的に理解できているかのように見える。しかし、「哲学」する者のほうからすると、「認識」し、「証明」し、また「論証」することだけに、そのたはらきが限定されることになってしまうのではないと言えるだろう。アポデクシス (論証) の意味を、ディダスケイン (教授) するということに限定して解釈する立場からは、それでよしとするかもしれないが。再び、先の『形而上学』Γ巻2章のテキストを、「哲学」と「ディアレクティケー」のそれぞれのはたらきを、排他的に解するのではなくて、次のように読み直すことによって、むしろ、「哲学」の守備範囲は広く確保されるのではないかと思われる。

ἔστι δὲ ἡ διαλεκτικὴ πειραστικὴ περὶ ὧν ἡ φιλοσοφία γνωριστικὴ (1004b25-26)
哲学がそれらについて認識もすることからについて、ディアレクティケーは吟味をする

これは、解釈であって、単なる翻訳ではないと言わなければならない。これは、ちょうど、『デアニマ』B巻5章の一節のラテン訳の解釈の問題を思い起こせばよいであろう。ギリシア語原文では、以下の通りであるが、

καθ' ἕκαστον ἢ κατ' ἐνέργειαν αἰσθησις, ἢ δ' ἐπιστήμη τῶν καθόλου (417b22-23)
現実活動している感覚は、個別的なものを対象とし、他方、学知は普遍を対象とする。

後半の部分が、意識されて、'intellectus universalium' となり、「知性は普遍にかかわる」という部分が、「知性は普遍をも対象とする」と解されることによって、感覚と知性の排他的二分法ではなくて、知性の対象領域が感覚の対象領域 (個別的な事物) にまで拡大されるという認識論的には、大問題となる事例である。これと同じように、『形而上学』Γ巻2章のテキストにおいても、「哲学」の対象領域を拡大する、いや、もともと、この範囲を対象としていたのだとすれば、拡大ではなく、対象領域の確認にすぎない。しかし、これによって、「哲学 (ピロソピア)」と「哲学を行なう者 (ピロソπος)」、「ディアレクティケー」と「ディアレクティケー

を行なう者(アリストテレスの言い方では、専ら、行なう者は、ディアレクティコイと言われる)」、また、「吟味(ペイラ)」や「論駁(エレノコス)」についても、これらを固定的に想定することは、必ずしも、アリストテレスのテクストに即しているとは言えず、同一人物が、ある問題を、ディアレクティケーの手法を用いて、吟味し、哲学の立場から、何らかの認識を得ることを妨げるものではないであろう。

3. アポリアー

アリストテレスが『形而上学』B巻で、アポリアーを列挙していることは、周知のことであるが、それらのアポリアーについてのより詳細な考察と解決は、『形而上学』のそれぞれ別の巻において、与えられているものもあれば、与えられていないと思われるものもある。

Wehrleは、彼の立場からすると、おそらくは、便宜的に、これをaporetic dialecticと呼ぶが、最終的には、これはディアレクティケーではないとする。

From what we know from others who practice such dialectic, the solutions not only are not found by means of dialectic, but also they must have been known even before the exercise began. (Wehrle, p.70)

そのようなディアレクティケーを行なう他の人々から我々が分ることからすると、その解決は、ディアレクティケーによって見いだされただけでなく、それが行なわれる前からすでに知られていたはずである。

それはどうしてかと言えば、Wehrleが問題として念頭に置いているアポリアーは、彼が、アンチノミー的なものとみなしているものだからであり、それらは、ことごらの真理そのものに訴えることにことによって、解決されるべきものだから、というのである。

This refutation-by-the-truth, though, is, as I have claimed, not part of dialectic at all. (p.71)

けれども、この真理による論駁は、すでに主張しているように、まったくもって、いささかもディアレクティケーではない。

この「真理による論駁」とは、どういうものかといえば、次のように言われる。

In aporetic dialectic, as we have seen, the antinomies are given no direct refutation. Rather, Aristotle leaves the antinomies standing as puzzles to be resolved by appeal to the truth. (pp.70-71)

我々が見てきたように、アポリアー的ディアレクティケーにおいては、アンチノミーには、直接的な論駁が与えられない。むしろ、アリストテレスは、アンチノミーが真理に訴えることによって解決されるべき難問のままであるようにおいている。

この指摘は、確かに、『形而上学』B巻だけに限定して考えれば、ある程度、あたっていると見える。通例、15問が列挙されると考えられている『形而上学』B巻のアポリアーは、そのほとんど(第13番目のアポリアーは、他の箇所にも詳細な考察と解決が見いだされない、とするのが一般的である)は、Γ巻やZ巻あるいはΛ巻などに、そのより詳細な考察と解決が見いだされるからである。しかし、その『形而上学』Γ巻やZ巻なども、アポリアー的ディアレクティケー(aporetic dialectic)が展開されているものとみなせば、Wehrleの指摘は、必ずしもあたらないと言える。

Wehrleがアンチノミーとみなすアポリアーの扱いとディアレクティケーとの関係について言えることは、Wehrleは、一方で、(a)ディアレクティケーを、基本的に、文字どおり、「人」対「人」の問答の形態で行なわれるものと考えているふしがあること、また、(b)アポリアーをアポリアーのまま提示して、解決を明示しない段階をディアレクティケーとして認めないという立場が根底にあるように思われる。これは、アリストテレスのディアレクティケーの解釈としては、なるほど、ある意味では、正しいと言える。(a)については、確かに、アリストテレス自身が、訓練のためにではあるが、

κἀν πρὸς μηδένα ἄλλον ἔχωμεν, πρὸς αὐτούς. (163b3-4)

我々は、たとえ、問答の相手として、他に誰もいないとしても、自分自身を相手に(問いと答えの訓練をしなければならない)。

と言っていることを考慮すると、アリストテレスにとって、ディアレクティケーとは、「人」対「人」の問答の形態で行なわれるものであった

と言えるのであるが、しかし、先の引用からは同時に、一人で、自分の中に、論敵を想定して、いわば、自己との対話のようなものも、アリストテレス自身によって想定されていたわけである。もっとも、これは、師プラトンから受け継いだ発想であろうが。また、(b)については、アポリアーをアポリアーのまま提示して、解決を明示しない段階に関しては、既に引用した『トピカ』A巻2章の Wehrle の読み方によって、その評価が定まっているようである。

if we are able to raise difficulties on both sides [δι-απορήσαι], we shall more easily discern both truth and falsehood on every point. (Wehrle, p.60)

もし我々が、ことからの両面について困難をあげることができれば、我々は各々の点について真と偽をより容易に見分けることができるであろう。

この段階は、Wehrle によれば、疑問点を列挙し、問題を提起するところまでで、解答を与える段階ではない。

But this pithy description of aporetic dialectic only commits Aristotle to the raising of the questions, not with giving the answers. (Wehrle, p.60)

しかし、アポリアー的ディアレクティケーの簡潔な記述によって、アリストテレスは、解決を与えることにはかかわっておらず、疑問点をあげることにしか、かかわっていない。

この点は、言葉の上では、先に言及した、ルガリーニの「ディアポレティカ」における、(2) δι-απορήσαι (そのアポリアーがもつ様々な観点から、それらを然るべく解きほぐすこと) に対応すると思われるが、その内実には、Wehrle のほうが、ルガリーニよりも、はるかに、禁欲的であり、内実に関して言うと、Wehrle の「ディアポレーサイ」は、ルガリーニの場合は、もう一段階前の(1) ἀπορήσαι (アポリアーの状態に至り、アポリアーを明るみに出すこと) に相当すると言える。これは、アポレーサイ、と、エウポレーサイの間におくと、その意味がかえってはつきりしない、ディアポレーサイの解釈の問題である。

1. 吟味的ディアレクティケー

さて、アリストテレスは、誤っていると思われる主張に対して、これを論駁する試みを随

所で行なっているが、Wehrle によると (Wehrle, p.71), その「論駁(エレンコス)」は、究極的には、「吟味的ディアレクティケー (peirastic dialectic)」に基づいているという。アポリアー的ディアレクティケーに対する消極的評価の結果、吟味的ディアレクティケーの出番となるわけである。しかし、その解釈は、ほぼ、Bolton のそれによっている。

Robert Bolton's interpretation of peirastic is interesting because, unlike most interpretations of dialectic, his[sic: he?] gives dialectic a certain role in facilitating the movement toward truth, even while dialectic itself always remains outside the scope of any special science. (Wehrle, p.71)

ロバート・ボルトンのペイラスティケー (吟味の術) についての解釈は興味深い。何故なら、ディアレクティケーに関する大抵の解釈とは違って、彼の解釈(彼)はディアレクティケーに真理へ向かう動きを容易にする一定の役割を与えているからである。たとえば、ディアレクティケーそのものは、常に、なんであれ、特定の学問領域の外にとどまっているとしても。

吟味的ディアレクティケーのこのような解釈はまた、Wehrle 自身がすでに Orwell 的であると批判していた Irwin のディアレクティケーの区分を、名称を変えただけで、認めることになりはしないか。Bolton には責任はないが、特に、『形而上学』I 巻 2, 4 章の矛盾律や排中律の扱いについては、このことがあてはまると思われる。この問題については、今一度、用いられているエンドクサ (ἐνδοξα, 通念) とタ・コイナ (τὰ κοινά) を、アポリアーの状況と吟味が行なわれる場面での認識論的ステイタスに関して、検討することが必要であると思われる。

文献

- Berti, E. 1996. "Does Aristotle's Dialectic Develop?" in W. Wians (ed.), *Aristotle's Philosophical Development, Problems and Prospects*, Maryland (Rowman & Littlefield Publishers, Inc.). 105-130.
- Bolton, R. 1990. "The Epistemological Basis of Aristotelian Dialectic," in D. Devereux and P. Pellegrin (eds.), *Biologie, logique et métaphysique chez Aristote*, Paris, 185-236.
- Bolton, R. 1994. "The Problem of Dialectical Reasoning (Συλλογισμός) in Aristotle," in *Ancient Philosophy* 14, 99-144.

Brunschwig, J. 1964. "Dialectique et ontologie chez Aristote," in *Revue philosophique de la France et de la l'Éranger*, 89e année, No.2, 179-200.

Cleary, J.J. 1995. *Aristotle & Mathematics: Aporetic Method in Cosmology & Metaphysics*, Leiden.

Devereux, D. 1990. "Comments on Robert Bolton's *The Epistemological Basis of Aristotelian Dialectic*," in D.Devereux and P.Pellegrin(eds.), *Biologie, logique et mèaphysique chez Aristote*, Paris, 263-286.

Irwin, T. 1988. *Aristotle's First Principles*, Oxford. de Rijk, L.M. 1977. *Middeleeuwse wijsbegeerte, Traditie en vernieuwing*, Assen/Amsterdam.

Lugarini, L. 1972(2e), *Aristotele e l'idea della filosofia*, Firenze.

Smith, R. 1997. *Aristotle Topics Books I and VIII*, Oxford.

Wehrle, Walther E. 2000. *The Myth of Aristotle's Development and the Betrayal of Metaphysics*, Maryland(Rowman & Littlefield Publishers, Inc.).

(あかい きよあき, 広島大学 [哲学])